第02章 — 人間の護衛

01 — 想定外の分類

雷神の最初の一撃で生じた胸骨下の損傷について、ロイの診断系は三つの説明を提示した。衝撃センサーの異常、電磁妨害、そして最も確率が低いと判定されたもの——人間が接触を通じて、精密なタイミングの機械的衝撃を伝えたという説明。

イマニは三番目を選んだ。「確率が低いことと、不可能なことは違うわ」

最初の誤りは、小さな身体なら脅威も小さいと思い込んだこと。二番目は、理解できない相手を電子的に停止させようとしたことだった。雷神の攻撃を受けた間も手首の装置は武装状態のまま、間違った問いへの、輝くばかりに無意味な答えとなっていた。

風神はロイと階段の間に立っていた。何が起きたか喜んでいる様子はない。ハヴェルは上階の扉から見下ろし、無関心と見間違えるほど落ち着いていた。

「俺に五人の人工追跡者を送ったな」とロイ。「その間、こいつら二人はずっとそばにいたのか」

「ああ」とハヴェル。

「なら、なぜレプリカントを送った」

「レプリカントは契約に記された命令に従った。この二人は、その命令に従う価値があるのかを何度も問い直した」

「それで、閲覧命令を持つ者を殴る価値があると判断したわけか」

雷神の顔がこわばった。風神が代わって答えた。「警告のつもりだった。誤った警告だ。階下には独立した証人がいる。この出来事を隠さない」

その違いは重要だった。とはいえ、胸の痛みが減るわけではなかった。

02 — 扉と法律

レイチェルは階段へ進み、閲覧命令を掲げた。「封印された資料室が対象です。生体研究の記録はそこにある。調査を終えさせて」

「封印された資料は移した」とハヴェル。

「いつ？」

「憲章より前だ。国家が私の名前を消すよりも前だ」

「その説明は弁護人にもしていただくわ」

元大臣はロイを見た。強い手を持つ者から身を守るために紙が役に立つと、まだ信じるのかと問うような視線だった。ロイは何も答えなかった。ハヴェルは争いを起こすことで、質問そのものを避けようとしているのではないか。

通信回線から弁護人の声が届いた。独立した令状を審理する間、誰も立入可能区域を離れないよう命じた。若い警官が到着したが、公的身分を失った元大臣を拘束するという発想には戸惑っていた。

「逮捕しろと言っているんじゃない」とレイチェル。「証拠を保全して、妨害を記録してほしいの」

風神が机の前を空けた。雷神はハヴェルの微かなうなずきを見るまで動かなかった。

机上の目録には、人間の神経組織、人工修復媒体、管理されたヘリウム試料、そして「六年の連続性／人間優先」と記されたファイルがあった。運送先を消された送り状も並ぶ。

ロイは自分では撮影しなかった。裁判所の手続に従って市民の立会人が写しを取った。隠されたものを奪ってしまいたい気持ちは強かったが、それでは捜査自体が信用できないという口実をハヴェルに与えるだけだ。

03 — 中庭の試験

資料閲覧は終了し、上層の部屋は封印された。弁護人が緊急の拡張命令を申請する。ハヴェルは審問まで別館を離れないことには同意したが、私文書の提出は拒んだ。証人たちが時刻と合意を記録した。

外の中庭、雨漏りする庇の下で風神がロイに近づいた。

「機械がかえってお前を危険にしている」

「脅しか？」

「観察だ。お前は動きの始まりを見て、残りを予測する。鍛えた人間なら、動き始めたあとで、その意味を変えられる」

ロイは診療所の図を広げた。「お前も雷神も電源はつけていなかった」

「その通り」

「力を測る装置は持っている」

「ならば、まだ名前の付いていない力を測ったのだろう」

風神は足元の水たまりを指した。「水を叩けば飛沫が上がる。でも触れた場所で跳ね上げなくても、水面の下には波を送れる」

「水は背骨じゃない」

「そうだ。そして人間も、交換部品の一覧から組み立てた機械ではない。たとえ多くの部分を置き換えていたとしてもな」

その言葉はロイの人格の否定ではなく、彼の戦闘資料が迷信として片づけてきた技法を指していた。

「観察の仕方なら教えられる」と風神。

「なぜ六年の理由を答えない男を守る？」

「私が離れれば雷神は言葉の代わりに拳で答えようとする。それに、私は大臣が刀を抜くところを見たことがある」

04 — 子どもの疑問

仮住まいに戻ると、クロノスは中庭での会話の記録を聞いた。暴力の映像を見たいとは言わず、身分を消された男を二人がなぜ守るのかと尋ねた。

「登録が消される前に、守ると約束したのかもしれない」とロイ。

「約束した理由がなくなっても、約束は有効なの？」

レイチェルが書類から顔を上げた。「命を守る約束は残っていい。でも誰かを傷つけるための約束なら、続けるべきじゃない」

クロノスは長く考えた。かつて彼は命令に従う追跡者として造られ、独立した最初の拒否によってほとんど破壊された。再検討することを許されない約束が鎖になるのを、彼は知っていた。

「ほかのレプリカントを止める道具を使った？」

「使いかけた」

「効いた？」

「いや」

「じゃあ道具が間違ったことを教えたの？」

「道具はできることを示しただけだ。俺が全員を同じ仕組みでできていると思い込んだ」

クロノスは答えを紙に記し、その下へ一文を足した。

機械でなくても、人は危険になれる。

05 — 十八番目のフレーム

イマニは天文台の写真を診療所へ運び、機械式の露光記号を別館の保管日付と照合した。ほとんどは無関係だった。だが、一枚だけ、三列の点がヘリウムを含む実験材料の出荷記録と対応した。

日付は、ロイの復活より十一年前。

「また十一年か」

「大きな資料群では同じ数字が出ることもある」とイマニは注意した。「でも今回は数字だけじゃない。同じ技師が機械の記録と出荷伝票の両方に署名している」

技師は六年規則が公表されるより前に亡くなっていた。最後の研究メモには奇妙な一文が残る。

パルスは力そのものではない。タイミングとは、力が許される瞬間である。

ロイは声に出した。雷神のほぼ無重量の接触と、内部に伝わった損傷を思い出した。

「分野は別だ」とイマニ。「似ているから同じ答えになるわけじゃない」

レイチェルは研究ノートの原本を請求した。私設の記録信託に預けられていたが、所有者の法的身分を確認できないという理由で廃棄予定になっていた。新憲章には異議を申し立てる手続があった。しかし時間は短い。

「その時間内に手続をする」とレイチェル。

紙の仕事には何時間もかかる。大臣の方が速く動けるかもしれなかった。

06 — 雷神が恐れるもの

夜明け、雷神は一人で給水所を訪れた。手を見える位置に置き、ロイに近づく。常連客は別館で何が起きたかを知らなかった。

「許可なくお前を打った」と雷神。「あれは間違いだった」

「暴行だった」

「そうだ。証言する」

「なぜ来た？」

「大臣が出発の準備をしている。書類を取られ、公に読まれるのを恐れている。お前が尋ねたことを恐れている」

「どの質問だ？」

「なぜ六年なのか」

ロイは彼を見つめた。「お前は何が怖い？」

雷神は、人間と人工の人々が区別なく並ぶ給水列へ目を向けた。

「機械が俺たちより長く生きれば、すべてを相続すると教えられた。信じていた。でも、運べない人のために水を運ぶ人工の男を見た。今は何を信じるべきか決められない」

「それでもハヴェルに仕えるのか」

「お前を殺せと命じられるまでは。命令が来る前に拒めるほど勇敢か、自分でも分からない」

07 — 名義のない保管庫

私設記録信託は旧保険会社の地下にあった。管理者は保全命令を不承不承受け入れた。紙の目録には、既に公的データベースに存在しない二人の署名が並んでいた。

レイチェルは「旧式産業化学」と記された箱から技師のノートを見つけた。文字は精密な測定と恐れを含む欄外注記の間を行き来している。内容は、神経信号のタイミングと長期間供給できるエネルギー源を組み合わせる研究だった。ある余白にはヘリウム3と小型閉じ込め機構、別の余白には臨床使用に必要な安定性へ一度も到達していないという警告がある。

人間の武術家が核エネルギーを発生できる証拠などない。ロイは今や、好みの答えを計器に肯定させる危険を十分に知っていた。

だが、ノートには確かな観測もあった。繰り返しの作動で疲弊した人工修復格子が、生きたニューロンのリズムに合わせた外部パルスを受けたとき、再び反応を示したのだ。

赤いインクで政策上の注記がある。

実証は非公開。認可された六年間を超える稼働延長は禁止。

署名はハヴェル。

レイチェルは三つの独立した写しを要求した。管理者はできると答えたが所有権争いを理由に難色を示した。エイドリアンは私的な持ち出しを避け、公的な裁判所保管を手配し始めた。

ロイは初めて、生き残った戦闘と自分に割り当てられた寿命の間に実用的な関係を見た。証明と混同はしない。だが、もはや偶然とも言えなかった。

08 — 待つ二人

夕刻、風神と雷神は別館の扉の前に背を向けて立っていた。封印命令を持つ裁判所の車が到着する。運転手は武器を持たず、同乗する立会人は携帯式の封印器具を抱えていた。

室内では、ハヴェルが机を片づけ終えていた。

「調査を受け入れろ」と風神。

「もう十分に渡した」と元大臣。

「渡したのは、発覚したものだけだ」

ハヴェルは二人を見た。「私を崇拝しろとは言っていない。ただ、最後の制限が外れたときに起こることを止めてほしかった」

「最後の制限は、殴れば止まる人間じゃない」

「そうだ。思想だ。そして思想は、まだ身体を持っているうちが一番止めやすい」

ハヴェルは杉材の戸棚を開けた。中には質素な鞘に収められた刀があった。鍔元に暗い帯が一つあるだけで、電子兵器として登録されたことはない。

雷神は目をそらした。風神はそらさなかった。

「その刀をロイに向けて抜くなら、もう誰も守っていないことになる」

ハヴェルは戸棚を閉めた。

「なら、刃に出会う前に手を理解できるよう、あいつを教えてやれ」

外では立会人が再び扉を叩いた。二人の護衛は、どう果たしてよいか分からなくなった義務の終わりに立つ、疲れた人間に見えた。